OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	ヴォーリズ（W. M. Vories）が韓国で手がけた住宅設計に関する研究
Author(s)	鄭, 昶源
Citation	デザイン理論. 2011, 56, p. 92-93
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53609
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

ヴォーリズ（W. M. Vories）が韓国で手がけた住宅設計に関する研究

鄭　昶源／㈱アスウェル

本研究は，1905年に来日し，宣教活動の傍ら，東アジアを舞台に建築活動を行ったヴォーリズ（1880～1964年）の住宅設計活動に関する研究である。彼は，活動の本拠地であった日本のみならず，韓国にも146件の建築設計を行っており，そのうち11件が住宅作品である。本研究では，この11件の現存設計図面を対象に，ヴォーリズの住宅観が窺える彼の著書『吾家の設計』の内容と現存図面の設計内容とを照らし合わせながら分析を試みた。

彼が韓国で手がけた住宅のクライアントは，釜山に計画された３件の日本人住宅を除けば，そのすべてが西洋人宣教師に特定される。西洋人のためのこれらコロニアル様式の住宅は，センターホールを中心とする田字型構成（American four-square house）がベースとなっている。１階は，書斎，リビング，ダイニング，キッチンの４室，そして２階には２～４室の寝室と浴室やトイレで構成されており，シンプルかつまとまりの良いプラニングといえる。特に，２階は寝室専用にするといった，室内空間の分割の基本となるパブリックとプライベートの区分は，アメリカにおいては18世紀半ばに登場し，19世紀半ばには狂信的な価値体系となり，間取りのデザインに徹底して持ち込まれたとされる。このような考え方は『吾家の設計』でも強調されており，彼が手がけた住宅計画においても徹底化された。さらに，そのほとんどの西洋人住宅には，日本人住宅には見かけないスリーピングポーチやパントリーなどが採用されるなど，その設計内容から当時のアメリカンホームの完全なる移植を試みたことが分かる。

一方，日本人のための住まい提案では，施主の和式生活方式・習慣を反映しつつ，『吾家の設計』に述べられた文化生活ができる和洋折衷住宅として計画されたことが確認できる。

表１．ヴォーリズの韓国住宅リスト

Title	Date
Residence for YMCA Secretary, Seoul (Job#8588)	1917.07
Residence for YMCA Secretary, Seoul (Job#8589)	1917.08
Residence for Dr. Stites, Seoul	1920.02
Residence for Methodist Mission	1920.03
Residence for Dr. H. B. Newell, Seoul	1925.05
Residence for Y. Akiyama, Fuzan	1925.07
Residence for Mr. Iwase, Fuzan	1925.08
Residence for YMCA Secretary, Korea (Job#8712)	1927.06
Cottage for Mr. W. Ono, Fuzan	1930.10
Residence for Miss. Rogers Joshin	1931.03
Residence for Mr. Gerdine, Seoul	1935.08

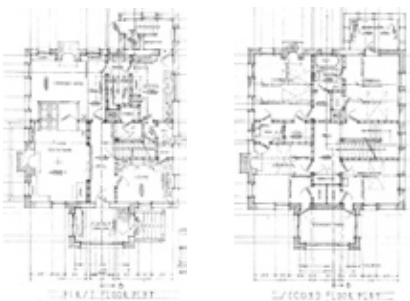

図１．Residence for Dr. Newell, Seoul

図２．Cottage for Mr. W. Ono, Fuzan

例えば，スパニッシュ・コロニアル様式の外観を持つ「Cottage for Mr. Ono（図２）」は，「Residence for Dr. Newell 邸（ 図 １）」と類似な田字型構成でありながら，リビングと書斎の代わりに和室が採用されている。さらに，２階の寝室が畳部屋となっており，五右衛門風呂を中心とする水周り空間が１階に設けられている。ヴォーリズは，『吾家の設計』において，「寝室は可能な限り２階に洋室で計画すべきであり，浴室はその寝室の近くに設けるべきである」と述べていたが，長年にわたって築かれた住まい文化を一気に変えることは難しく，和式生活を積極的に取り入れた和洋折衷の試みがこの住宅からも窺うことができる。

さて，ヴォーリズが韓国人のために手がけた住宅はなかったものの，宣教師住宅「Res. for Miss. Rogers Joshin（図３）」で韓洋折衷のデザインを試みたことは，特記すべきであろう。それはファサード表現において現れたものであり，韓国瓦屋根の軒先に奇数の雑像（宮殿建築等に採用された屋根飾り）を並べるなど，17回にわたり韓国へ渡ったヴォーリズが韓国伝統建築を十分に理解していたこと，また彼の韓国趣味が施された作品として特徴が見受けられる。

このような折衷の工夫は，ヴォーリズ事務所の韓国人所員であったに姜沇（カン・ユン）に引き継がれる。1920年に同事務所に入所した彼は，ヴォーリズの信頼を得た後，1938年に開設されたヴォーリズ建築事務所のソウル出張所の所長となった。

ヴォーリズの建築リストのうち，1938年以降に計画された表２の住宅は，日本に現存図面が保管されていないことなどから，戦争が深まるなかでソウル出張所が直接計画した可能性が高いと推察される。これらの住宅設計は，設計図がないため不明な部分が多いが，そのうちソウルにある姜沇の自邸「Mr. Y. Kang's Res.」を見つけることができた。

現存するこの住宅からは，姜が帰国直後に韓洋折衷の住宅を計画するなど，ヴォーリズから学んだ建築思想を韓国で展開していったことが分かる。

主に様式建築を手がけたとされるヴォーリズの建築において，韓国に渡った日本人の住宅に和洋折衷が，また西洋人宣教師の住宅に韓国趣味のデザインが，さらに弟子の作品に韓洋折衷の試みが確認できたことは，ヴォーリズが単なるアメリカ建築の移植にとどまらず，東アジアのバナキュラー文化を尊重しつつ新たな住まい文化の提案に積極的に取り組んだことの証左であり，改めて評価しておきたい。

表２．1938年以降の主な住宅作品リスト

Date	Title
1938年	Mr. S. Choi's Res. Seoul など５件
1939年	Rev. D. A. Swicord's Res. Chonju など７件
1940年	Mr. Anderson's Res. Inchon など５件
1941年	Mr. Y. Kang's Res. Seoul など16件
1942年	Mr. J. Kanemo's Res. Seoul など４件

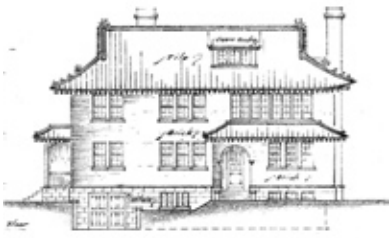

図３．Residence for Miss. Rogers Joshin

図４．姜　自邸（筆者撮影）